

デカルトとプロギユムナスマタの伝統

—— イエズス会学校のレトリック教育を經由して ——

久保田 静 香

はじめに——《la Creve》とは何か？

バンニウス氏の音楽というのは、ボエセの楽曲とは異なっていると思うのです。ちょうど自分が身につけたレトリックの規則をなんでも使ってみようとした生徒の《la Creve》が、そうした規則の痕跡の認めがたいキケロの演説とは違ってくるように。これについては彼には私から同じことを伝えてありまして、今となっては彼もそうと認めてくれているように思います。ただ、だからといって彼がたいへん優れた音楽家であり、もとより有能なオネットムでもあり私の親友でもあることには変わりありません。同様にして、およそ規則というものが、修辞学においても音楽においても有益なものであることにも変わりありません。¹⁾

これは一六四〇年十二月にデカルト (1596-1650) がメルセンヌ (1588-1648) に宛ててしたためた書簡のなかで、同時代のオランダとフランスの音楽家の楽曲について比較を試みている箇所である。オランダ人のヨハン・アルベルトウス・バンニウス (ca. 1597-1644) は作曲家・音楽理論家としてだけでなくカトリック司祭・法律家としても活躍したことから、デカルトも認めるように、十七世紀のフランス社会において理想とされた一般教養人、すなわち「オネットム」をいわば体現する人物であったと言えよう。にもかかわらず、かくも有能な「親友」の音楽をデカルトは、母国フランスの宮廷音楽家として名を馳せていたアントワーヌ・ボエセ (1587-1643) の楽曲と遠慮なしに引き比べ、前者をレトリックの生徒に、後者を古代ローマの大雄弁家キケロに見立てる。デカルトのボエセ最良は言うまでもない。さらにはこれとは別に、ボエセの楽曲を積極的に擁護した長文の書簡をバンニウスに書き送っているほどなのである。⁽²⁾

ところでここで注目したいのは、バンニウスの音楽の特質を伝えるために、デカルトがことさらに「Creve」といういささか見慣れぬ語を用いている点である。そもそもこの「Creve」という綴りは、デカルトの死後ほどなくして十七世紀中葉以降に刊行されたクレルスリエ版『デカルト書簡集 全三巻』(1657-1667) の第二巻に収められた当該書簡中にみられるもののだが、アダン・タヌリ版 (以下、AT版と略記) 『デカルト全集』⁽³⁾ ではこの語に対して「原文のマブ、代わりに「Chrie とするじマ (Sic pour Chrie)」との脚注がつけられている。⁽⁴⁾ このAT版での修正 (解釈) の影響は非常に大きく、以後刊行されたアダン・ミヨール版やアルキエ版といった主要なデカルトの書簡校訂版では、「chrie」という語が本文中で直接採用されているほどである。⁽⁵⁾ このAT版の指摘に沿った読みは、二〇〇五年に上梓されたG・ベルジョイオーゾ編伊対訳版『デカルト全書簡集』においても忠実に受け継がれており、原文の

「Creve」には「esercitazione」という訳語がつけられたうえで、脚注で「デカルトは「chie」の代わりに「Creve」という語を用いている」と明記されている。⁶⁾なお、このベルジョイオーゾ版は質・量ともに現在最も高く評価されており、本校訂版に大きく依拠して刊行された日本語版『デカルト全書簡集』（第四巻、二〇一六年）では、注釈なしで端的に「作文」と訳されている。⁷⁾

それに対して、フランスで二〇一三年に刊行されたJ. R. アルモガット版『デカルト全集…往復書簡編』においては、本稿で問題としている一語——アルモガット版でも本文中では「chie」と表記されている——に、次のような注が付されているを見逃すわけにはいかない。

C版〔Clitellusスリエ版の誤記か?〕では「creve」となっている。AT版は「chie」（学校の作文練習）と修正している。ただし、これは「craie」（esquisse 下書き、草案）とも読める。⁸⁾

こうしてこのアルモガット版において初めて、「Creve」は「chie」ではなく「craie」なのではないかという、新たな読みの可能性が提示されたことになる。ただそうすると、「Creve」が指し示すものは「chie」なのか、それとも「craie」なのか、という新たな疑問が生じざるを得ない。

以上のような、デカルトの一書簡中に現れるたった一語の語義をつきとめたいという極めて単純な動機から開始された研究の成果が本稿である。⁹⁾そこで考察の順序としてはまず、これまで大方の校訂版が拠りどころとしてきたAT版の修正、すなわち「Creve」は「chie」だとする見方に立ち、「chieとは何か」という問いに答えることから始

める。本稿の冒頭に引いたデカルト書簡の文脈から知られるように、「*« chie »*とはレトリックに関連する用語であり、特に学校で子どもたちがとりくむ作文課題のひとつであった。とはいえ、学校のレトリックの作文課題とデカルトの間にいったいかなる関係があるというのか。ここで思い出したいのが、デカルトは若き日にイエズス会学校のひとつであるラ・フレッシュ学院で徹底したレトリック教育を受けていたという事実である。これについては『方法序説』のなかに、それに関連する自伝的記述があるため、この記述に沿ってイエズス会学校の教育内容、とりわけそのレトリック教育のあらましを描くことから始めることとする。この探索をさらに押し進めていくなかで、古代ギリシア・ローマ以来の作文練習「プロギユムナスマタ (*progymnasmatia*)」の実態が明らかになるだろう。そして、このプロギユムナスマタが十六世紀以降になってイエズス会学校のレトリック教育プログラムに積極的に採り入れられたこと、よって必然的に少年デカルトもこれを学んでいたに違いないということがわかるだろう。最終的に、デカルト思想の成立にもなつて背後に退くこととなったヨーロッパ学芸の歴史的バックボーンの広がりほどを浮き立たせたいと考える。

一、デカルトとラ・フレッシュ学院

デカルトは一六〇七年から一六一五年まで、すなわち十一歳から十九歳までの八年間を、イエズス会ラ・フレッシュ学院の寄宿生として過ごした。ラ・フレッシュ (*La Flèche*) はロワール地方のアンジェ (*Angers*) から五十キロほど北東に位置し、一時間もあればひととおり歩いて回れる小さな町である。明るく澄んだ水と緑に恵まれたこの

町を流れる小ロワール川のほとりを起点に、決して広くはない街路を辿り歩いて十分たらずで、あの「旧」ラ・フレシユ学院のファサードの威容が目の前に飛び込んでくる。「旧」としたのはなぜかという点、二〇一七年現在においてこの「国立陸軍士官学校」(Prytanée national militaire : Lycée de la Défense de terre)の校舎に用いられており、フランス全国に六校あるエリート防衛高校のうちの二校として重要な役割を果たしているからである。以下にイエズス会ラ・フレシユ学院の設立過程と、その後に関学院が国立陸軍士官学校に転換するまでの歴史的経緯をざっと辿ってみることにする。

イエズス会が一五四〇年にローマ教皇パウルス三世の公式認可を受けて創設されて以来、宗教改革を掲げるプロテスタントの手に落ちた失地回復のための布教活動の一環として「教育」に最も力を注いだことは周知のとおりである。初めての本格的なイエズス会学校 (*collegium, college*) は一五四八年のシチリア島メッシーナ学院であるが、それ以前から、その前身ともいえる学校が、イタリア、ポルトガル、ベルギー、ドイツ、スペインなどの主要都市に相次いで創建されていた。そして一五五一年にはローマに、一五五三年にはウィーンにそれぞれ同修道会運営の学校が建てられていく。このようにして、ヨーロッパ各地で急速かつ確実な広がりをみせていたイエズス会学校の教育活動は、フランスではやや遅れて一五五六年、オーヴェルニュ地方のビヨン (Billem) に最初の学校が設立されたことで足場を築き、その後は一五五九年に南部のパニエ (Panniers) 、一五六〇年にはリヨン南西のトゥルノン (Tournon) と、主にフランス中部と南部の辺境の都市を中心に地元有力者 (高位聖職者、貴族、政治家) たちの歓迎を受けて浸透していった。

しかしながら、パリはこれらのフランス地方都市とはいささか事情が違った。中世以来、ローマ教会からの独立・

自立を謳うガリカニスムの伝統が特に強く、その牙城ともいえるパリ高等法院の後ろ盾をもって教育の場を独占していたパリ大学の抵抗を払いのけることは、ローマ教皇の遊撃隊たるイエズス会にとって容易なことではなかった。この情勢に突破口を開いたのは一五六一年にカトリクス・ド・メディシスの肝煎りで開催されたボワシー会談であった。この会談でついにイエズス会はフランスにおける公的活動の法的認可を得、一五六三年、ようやくパリにクレルモン学院（のちのルイ・ル・グラン高校）を開くことに成功したのである。にもかかわらず、三十年後の一五九四年に、時の国王アンリ四世暗殺未遂事件が起き、その犯人がかつてクレルモン学院の哲学講義に出席していたというだけで、パリのイエズス会全体に嫌疑がかけられ、同修道会は即座にフランス追放という憂き目に遭う。ただその後、イエズス会士からアンリ四世に対して強い働きかけが間断なく行なわれ、次第に王も心を許していくなか、一六〇三年、ルーアン勅令が發布され、イエズス会のフランス国内への帰還が許されることとなる。ただこの時点ではまだ、パリにおけるイエズス会への反感が根強く残っていることを知っていた王は、ブルボン家ゆかりの地として自分自身が幼年時代を過ごした思い出深い場所であるラ・フレッシュの城を改築して、そこにイエズス会学校を開くことを認めたのだった。この地への王の愛着がいかに強いものだったかについては、王が遺言で「死後は自分と王妃の心臓をラ・フレッシュ学院の教会堂中央に葬ってほしい」としたためていることから推察されよう。以上が、「ラ・フレッシュ・アンリ四世王立学院」(Collège Royal Henri IV de La Flèche) 設立までの経緯である。一六〇四年の本格始動後一年以内に、千人以上の生徒が入学したといわれている。^⑩ アンジュー州の小邑ラ・フレッシュに建てられたこの学院を、デカルトは『方法序説』で「ヨーロッパで最も有名な学校のひとつ」(AT, VI, 5)と評しているが、それもあながち誇張ではなかったことがわかるであろう。

こうして十七世紀初頭の開設以降、ラ・フレーシユ学院はデカルトやメルセンヌを初めとする思想家を輩出することとなる。十八世紀にはアベ・プレヴォー(1697-1763)もここに通って勉学に励んでおり、さらにイギリスの哲学者デイヴィッド・ヒューム(1711-1776)は『人性論』執筆のためにわざわざ学院を訪れ二年間を過ごすなどしている^[1]。しかし十八世紀も半ばを過ぎた一七六二年にイエズス会がフランスから完全に追放されるに至ると、ラ・フレーシユ学院はそれまでとは別の進路をとることとなる。きっかけとなったのは、一七六四年にルイ十五世(在位1715-1774)がこつを「シヤン・ド・マルス王立軍事学校準備校」(École des Cadets ou École militaire préparatoire à l'École royale militaire de Champ de Mars)としたことであった。大革命中の一七九三年にいったんは閉鎖されるものの、一八〇八年、ナポレオン一世(在位1804-1814, 1815)の命により再び「軍士官学校」として復活し、十九世紀の間に「王立軍士官学校」(École Royale militaire)、「国立軍士官学校」(Prytanée national militaire)などさまざまに名称を変えながら、先述のとおり現在は「国立陸軍士官学校」という、フランス陸軍エリート士官の養成を目的とする防衛高校となっている^[2]。二十世紀以降の著名な卒業生のなかには意外にも、映画俳優・監督として活躍したジャン・クロード・ブリアリ(1933-2007)や、モンテーニュおよびブルースト研究で世界的に知られるアントワーヌ・コンパニオン教授(1950-)がいる。特にコンパニオン氏はラ・フレーシユの士官学校で過ごした自らの少年時代を回顧して、『レトリック学級^[3]』という小説を書いてもいる。デカルトは若き日に「もしこの地上のどこかに学識ある人がいるとするなら、この学校にこそいるはずだ」(AT, V, 6)との期待に胸を高鳴らせたことを『方法序説』で告白しているが、十七世紀から二十一世紀の現代に至るまで、こうした優れた人材を輩出し続けているラ・フレーシユ学院は、名実ともにデカルトの期待に応え続けているとも言えよう。

二、イエズス会学校『学事規定』とデカルト「文字による学問」

さてここからは、このラ・フレーシユ学院で十七世紀初頭にデカルトが寄宿生として過ごしていたころ、イエズス会士たちによっていったいどのような教育が施されていたのかについて詳細を見ていくこととする。通常イエズス会学校について語る際、レトリック教育を重視するルネサンスの人文主義思想をとりこんだ画期的な教育プログラムが実施されていたことがまず強調される。「画期的」とはいえ、西欧教育史全体を眺め渡した際、ルネサンス人文主義思想を「初めて」教育プログラムに組み込んだのがイエズス会学校であったかどうかという点、そうとは言えない点に注意する必要がある。その直接のモデルは、十六世紀初頭のパリの数々の学寮 (colleges) で行なわれていた「パリ大学方式」(modus parisiensis) が提供したとする説¹⁴、または、一五三八年にドイツ人文主義者のヨハネス・シュトゥルム (1507-1589) が設立したプロテスタント系ギムナジウムすでに、イエズス会学校の試みを先取りするような教育が行われていたとの研究もある¹⁵。あるいはさらに時代を遡って、十四世紀末から十五世紀初めに「共同生活兄弟団」が建てた学校を起源とするという立場や¹⁶、さらには、十二世紀のシャルトル司教座聖堂学校での試みこそがそもそものルネサンス人文主義的教育の淵源だとして引き合いに出す向きもある¹⁷。

そうしたなかで、イエズス会学校教育の独自性を証立立てるものを挙げるとするならば、やはり歴史にその名を刻むテクスト、『学事規定』(Ratio studiorum) をおいて他にはないであろう。これは全編ラテン語でイエズス会教師向けに書かれたものである。内容は、生徒の教育指導にかかわるものだけでなく、学校の運営管理にまで及び、詳細を

極めている。上は学校が属する管区長から、校長、学監、各科目専門教員、下は学校用務員まで、完全なピラミッド型組織構造のもと、それぞれの役目、仕事内容、教授内容等々、巨細にわたって記述されている。もともとこのテキストが完成するまでには実に半世紀もの時間が費やされており、理論的検討と実践的思考の絶え間ない繰り返しを経るなか、とりわけイエズス会第五代総長クラウディオ・アクアヴィーヴァ (1543-1615) のもとでの本格的策定努力が功を奏し、一五八六年に第一次草案、一五九一年に第二次草案がそれぞれ世に問われ、さらなる修正が加えられたうえで、一五九九年にようやく決定版が日の目を見るに至る。¹⁹⁾ ラ・フレーシユ学院は、この一五九九年版がフランスで初めて実地で適用されたイエズス会学校であるという。²⁰⁾ また十七世紀前半はイエズス会教育史以上、同会設立の学校がどこも『学事規定』の規則に最も忠実であろうと努めた時期でもあった。²¹⁾ すると、ラ・フレーシユ学院が開校してわずか数年後にその生徒となったデカルトも、おそらくはこの一五九九年版『学事規定』の内容にもとづいた授業を受けていた可能性が非常に高い。そこでこのあと本稿では、デカルトが『方法序説』で自分の学校時代をふり返っている箇所をとりあげながら、『学事規定』の学科内容と比較してみたい。

『方法序説』において著者が少年時代に専念した学業一般についての所見が伝えられるのは、「第一部」および「第二部」においてである。まずは同著の導入部の語りにつけて、以下のような自伝的回顧が始まる。

わたしは幼いころからすでに文字（書物）による学問（aux lettres [= ad hierarum studia]）で育てられてきたのだが、それも、それによって人生に役立つあらゆることについて何か明晰で確実な知識を獲得できると言い聞かされてきたため、それをぜひとも学びたいという極めて強い願望を抱いていたからだった。ところが、その

デカルトとプロギユムナスマタの伝統

学業の全課程を終了すると学者の列に加えられるのが習わしだったのだが、いざそれを終えるや、わたしはまったく意見を変えてしまった。というのも、多くの疑いと誤りに悩まされている自分に気づき、勉学に努めながらも、ますます自分の無知を思い知らされるばかりで、それ以外には何も得るところがなかったように思われたからである。(AT, VI, 4, 541)

ここで「文字による学問によって」と一般に日本語に訳される「aux lettres」は、『方法序説』ラテン語翻訳版では「*ad litterarum studia*」と訳されていることからわかるように、いわゆるラテン語の「*litterae*」のことである。エチエンヌ・ジルソンは『方法序説——テキストと注解』のなかでこの表現を「人文学によって」(*litterae Humaniores; aux Humanités*)と読み替えるべきであると⁽²¹⁾、「ここでは、文法、歴史、詩、およびレトリックを指す」と注釈をつけているが、実はこれは適切とは言えない。ジャン・ラフォンの指摘にもあるように、この「*les lettres*」とはあくまで「知のあらゆる領域において、書かれたものすべて」(*tout ce qui s'écrit*)をカヴァーする「語なのである。右の引用文の後半から、デカルトは「文字による学問」に実際に身を浸してみても不満を吐露しているが、最終的に「文字による学問を完全に放棄する」(AT, VI, 9)とまで言い切る彼の意図するところは、これもラフォンが言うように、語学や文学や歴史の勉強を人生には役立たないものと切り捨てる代わりに哲学に専心することにしたという⁽²²⁾ことではなく、哲学はもとより科学分野をも含んだ「書物による学問すべて」を放棄して、「自己自身」(*soi-même*)と「世の中」(*le monde*)を知るための探究に身を捧げるという決意表明がなされていると考えるべきだろう。

改めて確認したいのは、デカルトが批判の対象とした「文字による学問」の内容である。『方法序説』「第一部」「第二部」にてリスト・アップの対象となっている教科については、「表1」B欄をご覧いただきたい。すると、まさしく、文系／理系の区別を超えた「文字に書かれたものすべて」と言い得る広大な領域に渡っていることがわかる。それぞれの科目の頭には、デカルトが記述した順番に沿って、筆者の手で通し番号を振った。そこでこれらを順ぐりに、イエズス会学校のクラス編成を学年順に並べた〔表1〕A欄と見比べていくと、多少の前後はあるにせよ、両者がほぼ時系列に沿ってきれいな対応関係をなしていることがわかる。

デカルトとプロギユムナスマタの伝統

表 1

A. イエズス会学校クラス編成	B. デカルト「文字による学問 les lettres」(AT, VI, 4-9 et 17)
I. 下級クラス (文法級) [五年間]	
文法学級 [三年間] - 下級 (第五学級) - 中級 (第四学級) - 上級 (第三学級)	①語学 (les langues) [ラテン語が主、他にギリシア語、ヘブライ語など] ②寓話 (la fable) [(4)雄弁 (5)詩]
人文学級 (第二学級) (=詩学級) [一年間]	③歴史 (l'histoire) [(4)雄弁 (5)詩 (la poésie) [(7)道徳]
レトリック学級 (第一学級) [一年間]	④雄弁 (l'éloquence)
II. 上級クラス (哲学級) [三年間]	
論理学 [一年間]	⑨-1 論理学 (la logique)
自然学〈数学含む〉[一年間]	⑥数学 (les mathématiques) [-1 幾何学 (la géométrie) -2 代数学 (l'algèbre)
形而上学〈道徳学含む〉 [一年間]	⑦道徳 (les écrits qui traitent des mœurs) ⑨哲学 (la philosophie)
※上級クラス終了後 [三-四年間]	⑧神学 (la théologie)
※大学 (ポワチエ大学)	⑩法律 (la jurisprudence) ⑪医学 (la médecine)
※課外読書	⑫秘術的学問 (les sciences les plus curieuses et les plus rares)・悪しき学説 (les mauvaises doctrines) [-1 錬金術 (l'alchimie) -2 占星術 (l'astrologie) -3 魔術 (la magie)

この表からもわかるように、イエズス会学校の教科課程は、「文法級」と呼ばれる下級クラスと「哲学級」と呼ばれる上級クラスの二層構造をなしており、とりわけ「文法級」の最上位におかれた「レトリック学級」が、上下両クラスを有機的に結ぶ蝶番の役目を果たしているのである。『学事規定』に記されている通り、「レトリック学級」での最終目標は「完全なる雄弁²⁴⁾」を全生徒に授けることにあり、それを到達点とする下級クラスでの学習は最下級である第五学級からすでにレトリック学習を意識した内容となっている。「レトリック学級」で締めくくられる下級クラスの五年間で培われた「完全なる雄弁」を基礎として、その後三年続く「哲学級」の学習へと引き継がれるという仕組みである。

三、「完全なる雄弁」を目指して——文法、人文学、レトリック

もともと、中世スコラ学とルネサンス人文主義の総合のうえに成り立つとされるイエズス会学校教科課程は、「(中世的な)ディアレクティックと論理学に対する(ルネサンス的な)レトリックの勝利²⁵⁾」と要約され得る面がある。それは同時に、哲学研究のうちに文学研究の方法と成果が大幅に浸透したことの現れである。これは、イエズス会創設者のイグナチウス・デ・ロヨラ(1491-1566)が十六世紀前半のバリで修学した際に得た「人文学の有用性」についての洞察、すなわち、あらゆるすぐれた思想は、よりの確な言語表現とともにこそあるという洞察の反映でもある。「哲学を始める前にレトリックを学ばなくてはならない」と各処で明記している『学事規定』²⁶⁾と、「文法級」を「哲学級」の前におきつつ下級といえども軽視しない教科課程は、このロヨラの根本思想を忠実に受け継いだものでもある

と言えよう。また、イエズス会学校の教育の独自性を語るに際してしばしばその人文主義的教育が強調されるが、「上級クラス」の学科内容が中世スコラ学の伝統を色濃く残したものであったことを鑑みれば、その独自性はレトリック色の強い「下級クラス」にこそ現れてくるとも言えるだろう。そこで次に掲げるのは、「文法級」と呼ばれるこの「下級クラス」で実際に何が学ばれていたのかを知るために、筆者が『学事規定』をもとに作成した一覧表である。²⁷⁾

デカルトとプロギユムナスマタの伝統

表 2

学級名	イエズス会学校授業内容
文法下級	目的：ラテン語統辞法初歩の完全な理解 内容：格変化から動詞を用いた文章の作成まで／二つの組 <i>duo ordines</i> となる場合は、下級組では名詞・動詞・作文の初歩と 14 の規則・名詞の性区別、上級組では名詞の格変化（細目は除く）・過去時制・目的分詞（スピースム）・統辞法初歩（細目は除く）・非人称動詞まで／キケロ作品の導入講義 <i>praelectio</i>
文法中級	目的：ラテン文法全体の知識 内容：動詞を用いた文章から文彩のある作文まで／ギリシア語では縮約名詞・縮約動詞・mi 動詞など最初歩／導入講義 <i>praelectio</i> ではもっぱらキケロの『友人宛書簡集』やオウィディウスの最も簡単な詩／下半期にはギリシア語カテキズム・テーバイのケベスの石版
文法上級	目的：ラテン文法の完全な知識（細目を含む） 内容：統辞法全体／文彩のある作文と韻律法／ギリシア語の初歩的な名詞／弁論家の著作：上半期にはキケロの最も重要な書簡（『友人宛書簡集』『アッティクス宛』『クイントゥス宛』、下半期にはキケロの『友情について』『老年について』『ストア派のパラドクス』）／詩人の著作：上半期にはオウィディウスの『哀歌』と『書簡詩』（不適切部分を削除）、下半期にはカトゥルス、ティブルス、プロペルティウス（不適切部分を削除）、ウエルギリウスの『牧歌』ないしは『農耕詩』や『アエネーイス』『五歌』『七歌』など最も易しい著作／ギリシア語では聖クリュソストモス、アイソボス、アガバトゥスなど
人文学級	目的：雄弁の土台の準備 (<i>preparare solum eloquentiae</i>) 内容：三要素（言語の知識、ある程度の博識、レトリック規則の簡潔な紹介）／言語の知識（語の正確さと豊富さ）／弁論家ではキケロのみ（道徳哲学を含む著作）／歴史（カエサル、サルストゥス、ティトゥス・リウィウス、クイントゥス・クルティウス・ルフスなど）／詩人（ウエルギリウス [ただし『牧歌』と『アエネーイス』『四歌』を除く]、ホラティウス『オード』、古典古代の他の有名な詩人の哀歌、寸鉄詩、詩 [猥褻な部分を除く]）／下半期にはシプリアノ・ソアレスをもとにレトリック規則の簡潔な要約、キケロの演説作品（『マニリア法擁護』『アルキアス弁護』『マルケルス弁護』）、カエサル面前での演説すべて）／ギリシア語（統辞法、ギリシアの著作家に関する知識、ギリシア語での簡単な作文）
レトリック学級	目的：完全なる雄弁 (<i>ad perfectam eloquentiam</i>) 内容：詩よりも散文重視／三要素（口頭表現、文体、博識）の鍛錬（手本はもっぱらキケロ）／キケロの修辞学書／アリストテレス『弁論術』および（もし役立つと判断すれば）『詩学』／ギリシア語（韻律法、著作家に関する知識、地方語を含む）

以下、右掲の表にもとづき、必要に応じて補足説明を加えることとする。

まずは三年間の「文法学級」で徹底してラテン語が学ばれる。現代にもなじみあるラテン語基礎文法から順次学んでいく様子が表から見てとれるが、とくに「文法下級クラス」(第五学級)の場合は、生徒の入学の年齢に差があったため(幼い子は七歳くらいから、デカルトは十一歳で入学)、必要な場合には二組に分かれて(*duo ordine*)授業が行なわれていた。また、この最下級クラスの段階ですでに、キケロ作品を題材とした「導入講義」(*praelectio*)がおかれているのに着目したい。「導入講義」とは、対象となるテキストの著者の伝記、テキストの属するジャンル、歴史や地理に関する説明、そこで用いられているレトリック技法の種類など、教師の側から講義形式でほぼ一字一句にわたって詳細な説明を行なうというものである。現代フランス教育の現場では「テキスト解釈」(*explication des textes*)の名で知られ、英語では「クローズ・リーディング」(*close reading*)という名称で親しまれているものにほぼ相当し、イエズス会学校の授業のあり方の特徴づけるものとして特筆される²⁸⁾。

「文法中級クラス」からはギリシア語学習が始まる。つまり、イエズス会学校ではギリシア語も必修であった。しかし、ラテン語と比べると重要度は格段に劣ると言わねばならない。事実、ギリシア語の授業は一日に一時間のみ、宿題は週に一回でよいとされる程度であった²⁹⁾。デカルト自身は学校時代からギリシア語にはほとんど興味を示さず、晩年にスウェーデンに渡った際、クリスティナ女王のギリシア語教師を前に、「ギリシア語などすっかり忘れてしまった」と得々と話したという逸話がある³⁰⁾。ヘブライ語も学ばれてはいたが、以上のようなギリシア語学習の事情を知るかぎり、その程度は推して知るべしというところであろう。

「文法上級クラス」では、古代ギリシアの寓話作家「アイソポス」の名に着目したい。この表にはみられないが、

パエドロスのラテン語テキストによる寓話作品も扱われていた。³¹⁾ もともとフランス語の《*table*》はギリシア語《*mythos*》の訳語でもあるため、しばしば「ギリシア・ローマ神話」を指し、イエズス会士によっても数々の「神話集」が刊行されている。³²⁾ アイソポスⅡパエドロスの寓話にせよ、ギリシア・ローマ神話にせよ、幼い子どもたちの興味を自然と掻きたてる虚構の物語をつうじて真実や教訓が学ばれていたのである。加えて「寓話」は、のちほど触れる「プロギュムナスマタ」の一課題でもあった。「寓話」については、デカルトが『方法序説』で「文字による学問」の内容をリスト・アップする際に、二番目に挙げていたことを思い出したい。

文法学級での学習をひととおり終えた後にやってくる「人文学級」では、明確に「雄弁の土台の準備」という目標が掲げられており、より積極的に雄弁力Ⅱレトリック技術の向上を意識した内容となっている。「詩学級」との別名をもつとはいえ、けつして詩の勉強だけに特化したクラスではなく、扱う素材はむしろ最もバラエティーに富んでいる。まず弁論（散文）作品はキケロのみとされ、イエズス会の奨励する「キケロ主義的美文」の書き手の養成が目指されていることが窺える。そのキケロの美文をつうじて「道徳哲学」にも触れる機会が与えられるわけである。詩（韻文）をとりあげる際には、とりわけキリスト教（カトリック）教義に照らして「不適切」とみなしうる部分および「猥褻な部分」が削除されたテキストが提供されることになる。加えて注意を要するのは、本学級で初登場となる「歴史」の学習である。ここで言われる「歴史」を、近代以降に優勢となった実証的歴史学のイメージでとらえてしまうと誤解を招く。これは古来、雄弁・レトリックに従属するものとみなされてきた「歴史」、すなわち、古典古代のさまざまな歴史書で語られる無数の「事例」(*exempla*)によって文章に彩りを添え、飾り立て、華やかさを増すための材料提供の場なのである。こうした意味での「歴史」によって得られる「博識」(*eruditio*)とは、「必要に

応じて自分の雄弁のなかに散りばめて用いる」ことができるよう、できるだけ多くの「事例」があらかじめ記憶しておかれた知識の宝庫のことを指す。弁論術＝修辞学に不可欠の教養としての「歴史」は、先述の「道徳哲学」とともに、あくまで「文飾」として重宝されたのだった。⁴³⁾

よってイエズス会学校の「人文学級」は、「文法」、「詩」、「歴史」、「道徳哲学」、そしてこれらすべての知識のあり方を下支えしながら方向づける「レトリック」という五つの学科からなっているとと言える。ここで思い出したいのは、十五世紀中ごろまでには、「人文学」(*les humanités*)、⁴⁴⁾「フマニタス研究」(*studia humanitatis*)と言った場合、まさしく上述の五科目を指すようになっていたという点である。ここに、ルネサンス時代に特有ともいえる学習内容と学級名との見事な符号がみられるわけである。そしてこの五科目中、最もルネサンス的とも言える「レトリック」の本格的な学習は、「人文学級」下半期から、シプリアノ・ソアレス (1524-1593) の『修辞学について (全三巻)⁴⁵⁾』を教科書として開始される。スペイン人のイエズス会士によって書かれたこの著書は、タイトルに「アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスに由来する」とあるように、古典レトリック三大著者によるレトリック書のいわばダイジェスト版である。第一巻はレトリックの定義とその五部門および「発想」(*inventio*)、第二巻は「配置」(*dispositio*)、第三巻は「措辞」(*elocutio*)、という構成であり、最後の第三巻の末尾で数ページほどにて駆け足で、「記憶」(*memoria*)、⁴⁶⁾「発音」(*pronuntiatio*)、⁴⁷⁾「発声」(*vox*)、⁴⁸⁾「身振り」(*gestus*)——最後の三つはいわゆる「口演」(*actio*)のうちに数えられる——について触れられて終わる。こゝ覧のとおりレトリックの五部門のうち、第三部門の「措辞」までの内容が大半を占めるところを見ると、イエズス会の教育が「書く」力の養成を重視していたことがわかる。口頭弁論を前提として編まれた古典レトリックが、ここにきて「よく書く」ための「修辞学書」へと変貌しよう

としているさまが見てとれよう。いわゆる「制限されたレトリック」の特質をもっていること、これがソアレスの修辭学教科書の第一の特徴である。第二の特徴は、序文に明記されているように、ソアレスの教科書は単に古代ギリシア・ローマの異教の学術的伝統を忠実に移植したのではなく、キリスト教の教えにそぐわない箇所を積極的に「削除」したうえでのものであるという点である。⁽²⁶⁾したがって、これはキリスト教徒にふさわしい美文を書くための要点が手際よくまとめられたレトリック教科書なのである。一五六二年の初版刊行後、十七世紀の半ばまで、このソアレスの教科書がイエズス会学校におけるレトリック学習の主要教科書として用いられ続けることになる。

以上のような多彩な内容をもつ「人文学級」という雄弁への準備段階を終えてようやく進んだ「レトリック学級」において、生徒たちはキケロの文体を理想とする「完全なる雄弁」の習得を目指し、レトリック＝修辭学の学習に打ち込むわけである。レトリックに完全に特化した本学級の文章訓練のすさまじさについては、たとえば『学事規定』「レトリック教師の規則・三九七」にある次のような記載を読むと、おおよそのイメージがつかめるのではないか。

教師が生徒の作文の課題を添削している間に生徒に与えられる練習は、たとえば次のようなものである。ある詩人ないしはある弁論家の一節を模倣する練習。庭園、寺院、嵐、その他、それに似たものを描写する練習。ある同じフレーズをさまざまに書き替える練習。ギリシア語の演説をラテン語に翻訳し、またその逆をする練習。ある詩人の詩文を散文に置き換える練習（ギリシア語とラテン語ともに）。一篇の詩をあるジャンルから別のジャンルに書き直す練習。寸鉄詩、碑文、墓碑銘を作る練習。ラテン語ないしはギリシア語の良質の弁論家の文章から表現を選び抜く練習。レトリックのさまざまな文彩を既定の主題に適用する練習。数多くあるレトリカルな文

ヤトボスから任意の問題のための論拠を引き出す練習。その他、こういったたぐいの練習である。³⁷⁾

このように、教師が答案を添削している間であっても生徒たちは手を休めるどころか、いっそう手の込んだ作文課題に取り組まねばならなかった。現代の日本では小学生から高校生に相当する未成年の生徒たちに対して、こうしたぐいの「よく書く」ための猛訓練が課されていたのである。少年デカルトもまた、級友たちと不断の競争状態におかれながら、厳しい作文練習に日々身を浸していたのであろう。³⁸⁾ 自らの意志で新たな哲学を始める前に、デカルトがこうした「ルネサンス的人文学」の世界に専心していた——専心させられていた——という事実には、もっと目が向けられてもよいのではないか。なお、学校時代の綴り方訓練の痕跡を示す格好の実例として、若きデカルトがポワチエ大学法学位論文に献辞として添えたラテン語の文章³⁹⁾ (1616) と、最晩年にスウェーデン女王クリスティーナの求めに応じて書かれたバレエ作品『平和の誕生』⁴⁰⁾ (*La Naissance de la Paix*, 1649) を挙げることができる。

四、プロギユムナスマタとクレイア

以上までの考察で、ルネサンス人文主義思想を積極的に導入したイエズス会の学校教育において、レトリック学習がいかに重要な位置を占めていたかを見てきた。年端もいかぬ下級クラスの子どもたちにもどれほど高難度の作文練習が与えられていたのかについても、前述したとおりである。問題となるのは、これらの作文練習が具体的にどのようなものであったか、すなわち、教師からどのような課題が出され、生徒たちは実際にどのような文章を書いていた

のか、ということである。その一例を知るための大きな手がかりとなるのが、『学事規定』「人文学級の規則・時間割(三九六)」にある記述である。

休日の一時間目には、前日の導入講義の内容を暗唱し、いつものように、残りの宿題の添削をする。二時間目は寸鉄詩やオードや哀歌、ないしやプリアノ・ソアレスの第三卷(転義、文彩、とりわけ弁論のリズムと結句・脚)に充てることで年の初めに生徒たちにそれに慣れてもらうか、何らかの *chia* か *progymnasma* を説明したり復習したりするか、あるいは討論する。⁽¹¹⁾

この引用にもすでに、いくつかの文芸ジャンルが挙げられているが、特に最終行で姿を見せる *chia* と *progymnasma* とという二つの語が目を引く。実はここに登場する *chia* と *chia* とこそ、本稿の冒頭に掲げたデカルト書簡中の *la Creye* に相当するものと長らくみなされてきた *la chie* (クレイア) とであって、これは *progymnasma* (プロギユムナスマ) と (プロギユムナスマの単数形) の一種なのである。なお、「プロギユムナスマ」の複雑で込み入った内容と歴史の変遷過程については、欧米においてはもとより、日本においては月村辰雄氏の研究を嚆矢とし、堀尾耕一氏がこれを発展的に受け継いできた。⁽¹²⁾ これらの理論的・歴史的考察と並行して、香西秀信氏らのようにプロギユムナスマを小中学校の国語教育・作文練習の授業に役立てようの実践的試みもすでになされている。⁽¹³⁾ ここ二〇年ほどで日本におけるプロギユムナスマ研究は、理論と実践の両面において、まさに格段の成果をあげてきたと言える。以下、これらの成果に依拠しながら、プロギユムナスマとクレイアの関係と内容につ

いて概要を整理する。

「プロギュムナスマタ」とは、古代ローマ時代の青少年たちの教育の中心となった「模擬弁論」(declamatio)に先立って修めるべき「予備練習」(pro = avant; *gymnasmatia* = exercises)のことである。紀元後一世紀から五世紀ごろにかけて書かれ、五世紀から六世紀ごろにビザンツ帝国の学者たちによって編纂された写本「ヘルモゲネス修辞学体系」(*Copius Hermogenianum*)の一部を構成し、およそ一五〇〇年の長きにわたって東のギリシア語圏のレトリック教育の支柱をなしていた。もともと複数の著者による同名の教科書が存在したが、なかでも四世紀後半から五世紀初頭にかけて活躍したアンテيوخアのアプトニオスの手になる『プロギュムナスマタ』が定番として用いられるようになってからは、十四の課題に固定された。①寓話 (mythos) ②物語 (diegema) ③言行 (要録・逸話) (chreia) ④格言 (gnome) ⑤反駁 (anasthene) ⑥確証 (katasthene) ⑦共通論拠 (koinos topos) ⑧称賛 (enkhomion) ⑨非難 (progos) ⑩比較 (synkrisis) ⑪性格づけ (ethopoia) ⑫描写 (ekphrasis) ⑬一般論題 (thesis) ⑭立法弁論 (nomou eisphora) である。これらは一連の教程として本来はレトリック教師が担当すべきものとみなされていたのだが、レトリック教師たちは実際にはより高度な「模擬弁論」(デクラマティオ)を教えたがり——つまり、プロギュムナスマタはあくまでデクラマティオの準備段階にすぎないと軽視されていた——、その前段階の課程を担うものとしての文法教師が引き受けることも多く、古代以来、教育課程におけるその位置づけは流動的であった。この点、イエズス会の学校では、「文法学級」と「レトリック学級」の間に設けられた「人文学級」において、クレイアをはじめとするプロギュムナスマタが学ばれていたというのは実に意義深い。プロギュムナスマタは誰が教えるべきか、文法教師か、レトリック教師か、といった二者択一の問題が、人文学教師という中間的存在をおくこと

によって解決されるからである。いずれにしても、上記十四課題の覆う内容は非常に広く、「寓話」や「物語」といった文法学習の延長上にあるものから、「反駁」、「確証」、「一般論題」、「立法弁論」など、本格的な説得的弁論の構成方法にかかわるものまで目配せがなされていることがよくわかる。それだけではない。そもそもこれら十四課題のひとつひとつに対してまでも、教場で生徒たちがよりよい実作に至るために守るべき手続きが、具体的な実例をもって事細かに記されているのである。

さて、このようなプロギュムナスマタ課題の三つ目に配されているのが「クレイア (*chreia*)」だということになる。日本語では「言行」とも「要録」とも「逸話」ともさまざまに訳されるギリシア語の「クレイア」であるが、ラテン語では *usns*、フランス語では *utilise* に相当する語で、語源的には「有用性、役立つもの」を意味する。殊にプロギュムナスマタの文脈では、「ためになる教えを含んだ古人の言行を論題とし、その人物の人物と結びつけて教えを敷衍・解釈する練習」のことを指す。こう言われてもまだその実態は捉えかねようが、それが近代以降のヨーロッパの教育課程で果たした役割の重要性については、十八世紀のイエズス会ルイ・ル・グラン学院レトリック教師のジョゼフ・ド・ジュヴァンシー (1643-1719) が、クレイアのことを「雄弁を準備する文芸課題の女王」と呼んで特別扱いしていたことを思い起こせば、おのずと知られるであろう。

クレイアの起源には諸説ある。ディオゲネス・ラエルティオス (fl. ca. III^e siècle AD) が『ギリシア哲学者列伝』のなかで、クラテス (ca. 365-ca. 285 BC) の弟子メトロクレス (fl. ca. 325 BC) を最初のクレイア集の執筆者と名指していることから、長らくこれが信じられてきたが、今日ではこのラエルティオスの言葉は疑問視されている。最初の著者を明確に同定することはできないにせよ、ソクラテス (ca. 469-399 BC) の弟子が活躍していた紀元前五―四

世紀には少なくとも遡ることはできるようである。³⁰⁾ そうしたなか、具体的にクレイアで用いられる論題として、世紀を超えて最大の人気を保ったのが犬儒派ディオゲネスの言行であった。彼の言葉や行いはたいがいが素っ気なく、ぶつさらぼうで、粗野でさえあるが、哲学的にも道德的にも含蓄と智慧に溢れているものが多く、若いうちからそれに親しんでおくことは畢竟「役立つ」とみなされたのである。³¹⁾

クレイアには大きく分けて、①発話型（偉人の発した言葉そのものにとづくもの）、②行為型（偉人の行ないにもとづくもの）、③混合型（発話と行為を同時に含むもの）、の三種類がある。たとえばディオゲネスの言行を例にとれば次のように分類されうる。①発話型…「ディオゲネスは、お世辞は蜂蜜で人を窒息させるようなものだ、と言った」、②行為型…「ディオゲネスは、高貴な生まれや名声といったものはすべて悪徳のための飾りとみなして冷笑していた」、③混合型…「ディオゲネスは不心得な若者を見たとき、その養育係を小突いて、どうしてそんな教育をするのか、と言った」、という風である。生徒たちはこうした個々のクレイアから一つの論題を課され、既定の八つのステップを確実に踏みつつ、文章を敷衍・拡張しなければならぬ。その際の八つのステップとは次のとおりである。

①称賛（論題となった言葉の発言者（ここではディオゲネス）の人物像を紹介し、称賛する）、②敷衍（論題を敷衍でパラフレーズする）、③根拠（論題の内容が正しいことの根拠を示す）、④反論（論題の内容に反する主張を提示する）、⑤類比（似たものや譬えをもって示す）、⑥実例（実例をもって示す）、⑦権威的言説（先人の言葉を引き合いに出す）、⑧結語（論題の発言者の卓越性とその発言内容の正しさを改めて讃える）。以上の手続きに従って書くことで、最終的に、初めに課されたたった一行の短い論題が、数十行から百行ほどへとおのずと膨れあがって立派な弁論プロキユムナスマタ、小論文へと変貌するという仕組み、これが「クレイア」と呼ばれる青少年向け「綴り方」予備練習の課題の全

容である。⁴²⁾

五、東西ヨーロッパ教育文化圏の邂逅——イエズス会版プロギウムナスマタへ

次に、以上のクレイアを含むプロギウムナスマタの伝承過程に目を転ずることとする。すると、古代から中世・ルネサンス期に至るまでの東西ヨーロッパにおけるレトリック教育のあり方に根本的な相違がみられたことが明らかとなる。先述のとおり、アプトニオスのプロギウムナスマタを組み込んだ「ヘルモゲネス修辞学体系」は、古代ローマ帝政期から十五・十六世紀に至るまでヨーロッパ東側のギリシア語文化圏においてレトリック教科書の規範^{カノン}となつて安定した地位を保ち続け、他にその場を譲ることがなかったのに対して、ヨーロッパ西側のラテン語文化圏のレトリック教育の規範的書物は、時代とともに大きく移り変わった。もとより西側文化圏においてもプロギウムナスマタは、紀元後一―二世紀のクインティリアヌス (ca. 35-ca. 100) やスエトニウス (ca. 70-ca. 140) によつてすでに知られており、六世紀には『文法学教程』 (*Institutiones grammaticae*) の著者として名高いプリスキアヌス (fl. ca. 500) によつてラテン語に翻訳されてはいたが、中世期にはその存在はほとんど忘れ去られるところとなった。その中世期にレトリック教育の分野において他を圧倒する存在となったのは、まずもつてキケロ (106-43 BC) の『発想論』であり、当時キケロに誤つて帰されていた『ヘレンニウス宛レトリック』であった。その一方で、フランソワ・ド・ダンヴィルの指摘にあるように、中世の大学において「レトリックは無視されていたに等しかった。大学の〈課外〉授業、すなわち二次的授業のうちに数えられるにすぎなかった」⁴³⁾。事実、西洋中世の大学におけるスコラ論理学の異常

デカルトとプロギウムナスマタの伝統

なまでの発達を横目にレトリック学習は脇に追いやられるかたちとなっていたのだが、それでも自由七学芸の一つとして学び続けられていたレトリックの教科書として独占的な地位を占めていたのが「ボエティウスのトピカ第四巻」だったのである。

このように、キケロやボエティウス (ca. 480-524) の著作が非常に大きな影響力をもった西の中世ラテン語圏とは異なる教育文化が、同時期の東のギリシア語圏に浸透していたことの意義は大きい。堀尾氏の鮮やかな分析によって明らかになったように、一般論題 (*thesis*) と個別案件 (*hypothesis*)⁽³⁴⁾ をともに青少年の作文予備練習に不可欠のものとしてとりこんでいた東側のレトリック教科書＝プロギュムナスマタと比べて、一般論題と個別案件とを明確に区別し、前者は哲学の扱う問題領域だとして後者のみをレトリックの領分に充てた西側のレトリック書の扱う範囲は当然のことながら「狭く」ならざるをえない⁽³⁵⁾。こうしたいわば「狭い」レトリック観に甘んじていた西のラテン語文化圏が、十五世紀後半に東西ヨーロッパ間の交流が再開するちょうどそのころ、プロギュムナスマタという人間の言語活動全般への配慮にもとづく若者向け作文練習の伝統に接することとなる。これに大きく貢献したのが、一四七〇年代後半、ネーデルラントの人文主義者ルドルフ・アグリコラ (1483/4-1485) による、アプトニオス『プロギュムナスマタ』のラテン語への翻訳であった。とりわけ一五三二年にアグリコラ版とマリア・カタナエス版を合体させたラテン語版『プロギュムナスマタ』が刊行されるや爆発的に版を重ね、西側文化圏において東側由来のレトリック教科書が急速に浸透していき、たちまちにして市民権を得ることとなる⁽³⁶⁾。

特筆すべきは、十六世紀半ばに設立された新興の修道会たるイエズス会の学校において、このラテン語版のアプトニオス『プロギュムナスマタ』が積極的にとりいれられ、シプリアノ・ソアレスの『レトリカ』と並んで正式な教科

書として指定されるに至った点である。早くは一五八六年の『学事規定』第一次草案の刊行以前にすでに、ローマ学院の学習規則のなかでプロギウムナスマタの内容が明記されている。⁽³⁷⁾ 十七世紀に入るとイエズス会士の手で独自のプロギウムナスマタ教科書が続々と編纂され始めるのである。

十七世紀前半では目ぼしいところのみならず、一六三六年にソアレス『レトリカ』にアプトニオス『プロギウムナスマタ』が付け加えられた版が出ている。⁽³⁸⁾ 次に、一六四七年に刊行されたシャルル・パジヨ (1609-1686) による『雄弁への手引書』(Tyracium eloquentiae)⁽³⁹⁾ が目に留まる。パジヨ神父によるこの著書は、全三五八頁中プロギウムナスマタに割かれているのはわずか二十頁ほどで、課題数も本来の十四ではなく九つに絞られており、「審議的弁論ジャンル」として寓話、物語、クレイア、格言、一般論題が、「法廷的弁論ジャンル」として確証、反駁、共通論題、立法弁論がそれぞれ割り当てられている。⁽⁴⁰⁾ 加えて、パジヨ版にはソアレスの『レトリカ』の内容がほぼ原文に即して再録されている。じつのところ、それまで五十年以上にわたってイエズス会学校の教科書として用いられ続けてきたソアレスの『レトリカ』にとつて代わったのが、このパジヨ版『雄弁への手引書』であった。⁽⁴¹⁾

十七世紀後半になると、一六五九年にジャコブ・マセン (1606-1681) の『弁論術の訓練』(Palaestra oratoria)⁽⁴²⁾ とフランソワ・ポマー (1618-1673) の『修辞学の生徒』(Candidatus rhetoricae)⁽⁴³⁾ が出されており、とりわけ後者は前述のパジヨ版の後を継いでイエズス会学校レトリック教科書の地位に昇格した。⁽⁴⁴⁾ ポマー版『修辞学の生徒』では、全四〇八頁のうち一六五頁分がプロギウムナスマタについての内容で、とりわけクレイアについては最も多くの八十頁が割かれている。教師の立場から幼い子供たちへの負担軽減を考慮してか、ここではプロギウムナスマタ課題は七つ(寓話、物語、クレイア、格言、性格づけ、一般論題、共通論題)にまで削られている代わりに、それらひとつひとつ

つに對してより詳しい説明が与えられている。⁽⁶⁵⁾ こうしたことから、プロギュムナスマタへの関心がイエズス会士の間でいっそうの高まりを見せていたことが知られるだろう。しかしながら、ポメーによるこの詳しい説明がかえって仇になった側面がある。これは、もともと原著者アプトニオスの簡潔な記述に、ポメーがわかりやすさを期していれば恣意的に言葉を重ねてしまった結果であった。こうしたいささか不備の目立つものとなっていたポメー版の全面的な見直しを経て、十八世紀初めの一七一二年に刊行された改訂版が、ジョゼフ・ド・ジュヴァンシーによる『修辞学の生徒』(Candidatus rhetoricae)⁽⁶⁶⁾であった。シャルル・ロラン(1661-1741)やヴォルテール(1694-1778)も贅辞を惜しまなかった十八世紀を代表するイエズス会レトリック教師の手になる本書は、同年二月の『トレヴーの回想録』(Mémoires de Trévoux)にて、「冗長で散漫書き方でもって、些細な記述を多く入れ込んでしまった」ポメー版とは違い、「アプトニオス版に肉づけし、ポメー版の贅肉を落とし、ジュヴァンシー版はこれぞ適切といった完璧さの域に達している」と絶賛されている。⁽⁶⁷⁾ たとえば本書では、全三七六頁のうち一一八頁分がプロギュムナスマタに割かれており、ポメー版と比べて分量自体は減る一方、課題数は若干増えて九つとなったことから、各項目への説明は無駄が省かれ、より簡明になっている。⁽⁶⁸⁾ こうしてポメー版はすぐさまこのジュヴァンシー版に場所を譲り、後者は信頼にたる新たなレトリック教科書として、パリのルイ・ル・グラン学院をはじめとするフランス全土のイエズス会学校に急速に浸透することとなる。もともと、これだけの高評価と知名度を誇ったジュヴァンシー版であったが、早くも五年後の一七一七年にはドミニック・ド・コロニア(1660-1741)の『修辞学・全五卷』(De arte rhetorica)に主役の座を明け渡している。⁽⁶⁹⁾

以上、イエズス会版レトリック教科書におけるプロギュムナスマタの扱われ方の変遷過程を確認したところで、今

度は、その形式と内容の特徴を見てみよう。まずは形式面で目を惹くのは、ポメー版以降に現れた「問答形式」である。とりわけジュヴァンシー版においては、極めて短い問いかけと、それに対するできるかぎりの簡潔な回答が、ある種の洗練をもって順々に積み重ねられていくところが印象的である。たとえばクレイアに関する章では冒頭から、「問…クレイアとは何か?」「答…それはためになる叙述ないしは説明で、ある言葉を展開したもの、ある行為を展開したもの、またはその二つの組み合わせからなるものを増幅させていくものだ」という定義が始まり、続けて「問…この増幅法の一ジャンルは、なぜクレイアと呼ばれているのか?」「答…なぜなら〈クレイア〉という語はギリシア語で〈有用性〉を意味するからで、それゆえ〈クレイア〉を〈役立つもの〉と呼んでいる著者もいる」といった風に、「一問一答」のやりとりが続けられ、一歩一歩階段をのぼるように解説が加えられながら、初めてその内容に触れる者でも一読して理解できるようになっているのである。⁽¹⁶⁾ これらのイエズス会版と、問答形式をとっていない十六世紀のアグリコラ版とを比べると、一見して迷いなく、とっつきやすさ、わかりやすさの面で前者に軍配があがる。イエズス会学校における子ども目線に立った教科書作りの一端が垣間見えると言えよう。⁽¹⁷⁾

次に内容面の特徴としてまず注目されるのは、「クレイア」や「称賛」といったプロギユムナスマタ課題の論題として、聖ヒエロニムス (ca. 347-420)、聖アウグスティヌス (354-430)、聖フランチェスコ (1182-1226) などのキリスト教聖人の言行が積極的に採用されている点である。その一例として、「聖フランチェスコは同志たちと町中を歩き回り、言葉ではなく身をもって範を垂れた」という「行為型クレイア」がある。⁽¹⁸⁾ 次に目が留まるのは、クレイアの例に、古典古代の偉人のみならず、近世以降に活動したイエズス会士の言行も含まれている点である。「ファミアノ・ストラーダ神父は、指導者は決して独りでは罪を犯さない、と言った」という「発話型クレイア」がそれであ

る。²³⁾ところで、クレイアの作文課題では、最初に論題の発言者を称賛することから始め、最後にその発言の卓越性と正しさを確認することが要求されていたことを思い出したい。上述した事例は、有名なキリスト教神父や有能なイエズス会士という権威ある人びとに関連づけられる言行であり、クレイアとは、そうした権威と含蓄のある言葉を出発点として、ありうるかぎりの視点(論点)を経巡りながら言葉を尽くし、論題にとりあげられた人物とその言行を「いかに巧みに褒めあげるか」を主眼とする作文練習である。クレイア課題をこなすための秘訣とは、要するに「うまく褒め方を知る」ことなのだが、その秘訣を初心者に伝授するために、ジュヴァンシー版では、古典古代の著作家やキリスト教神父たちによる「称賛のディスクール」の実例がいくつも列挙されている。²⁴⁾こうしたクレイアの論題を繰り返し読んで、称賛しながら書き綴ることを求められた子どもたちは、キリスト教の伝統的教義やイエズス会の理念・道徳観を、「模倣の原理」にもとづく日々の作文練習を通じてそれとはなしに教え込まれ、刷り込まれていったにちがいない。

以上に確認してきた事柄を整理してみると、それらがきれいに古典レトリックの一般規則にあてはまることがわかる。すなわち、文章の冒頭(*exordium*)で、しかるべき人物の人柄(*ethos*)と言行を称賛することで読み手の好意を喚起し(*captatio benevolentiae*)、発想(*inventio*)の貯蔵庫(*topoi*)から思い思いに選び出した文例(*exempla*)に倣い、効果的な素材を手際よく配置して(*dispositio*)、文章に彩りを添える(*elocutio*)——こうした古典レトリックの典型ともいうべき文章作法が、東のビザンツ文化圏由来のプロギュムナスマタ、なかでも「文芸課題の女王としてのクレイア」を介して、西側キリスト教圏の子どもたちの頭と手を動かし鍛えていたようすが、ありありと浮かびあがってくるのである。

おわりに——「文字による学問」を放棄して

さて、本稿の冒頭の問いに戻ろう。「*Creve*」とは何か? 「*chrie*」なのか、「*cräie*」なのか? 「これに答えるために開始されたのが本研究であった。さしあたって、デカルト研究者の間で長らく支持されてきた「*Creve* = *chrie*」という解釈にもとづき、歴史のなかでその正体が霞んでしまった感のある「*la chrie*」の内実に迫るために、デカルトが十代のころにイエズス会学校で授けられた教育内容、とりわけレトリック教育の内容を確認するなかで、図らずもその一端を担っていたプロギユムナスマタ課題の存在が明らかになり、その長い伝統の端緒と変遷・受容過程までも含めて辿ることとなったのである。この探索の旅をひととおり終えてみて言えるのは、冒頭に引いたデカルトの書簡の文脈を汲むかぎりでは、オランダの友人バンニウスの音楽を「自分が身につけたレトリックの規則をなんでも使ってみようとした生徒のクレイア」に喩えることは何ら不自然ではない、むしろ納得がいく、ということである。ために「*Creve* = *cräie*」と解して、デカルトが同じ友人の音楽を「生徒の下書き、草案 (*la cräie* = *lesquisse*)」同然と評したと考えた場合、それはいささか批評が辛辣すぎる。もう一方のフランス人ボエセの楽曲は「キケロの演説」に喩えているだけに、評価の落差があまりに大きい。それに、デカルトから直接バンニウスに宛てたボエセ擁護の書簡(一六四〇)のなかで、デカルトはバンニウスのことを「音楽全般に完全に精通された方」(*tu, in omni re Musica pertissimus et consummatissimus*) (AT, III, 829) ともちあげ、このオランダ人音楽家が「音楽の学識」(*Musicae scientia*) (AT, III, 830, 834) の面で卓越していることを繰り返し強調しているところをみれば、

デカルトとプロギユムナスマタの伝統

根本に友人への敬意があつての批評であることもわかる。この点、クレイアは修辞学の作文課題の代表格として位置づけられ、細かな規定に精通しつつひとつひとつのステップを確実に踏んでいくことが求められる綴り方訓練のひとつの型であつたことを鑑みれば、学識勝りとデカルトが皮肉交じりに評するバンニウスの音楽とのアナロジーは、むしろすんなり理解されるのである。

ただ、それでもなお、「Creve」は「craie」と読むべきであつて、「chrie」はアダン・タヌリ版の穿ちすぎた解釈だとする可能性も完全には否定できない。音韻変化上は「Creve」を「chrie」と読める余地はほとんどないからである。^{②5}しかし、たとえアダン・タヌリ版の指摘が誤りだつたということになろうとも、その誤りのおかげで、私たちはクレイアとデカルトの意外な関連性に気づくことができたとも言える。『学事規定』（一五九九）の記述にもあつたように、デカルトが学んでいた当時のラ・フレイシユ学院でもクレイアが学ばれていたことはほぼ確実なのだから。

イエズス会学校で推奨された、「書かれたもの」と「書くこと」とのあいだの絶え間ない往復を旨とする教育は、まさしく「文字」が主体であつたと言えよう。規則の熟知と型のマスターの程度をもって優劣が量られるタイプの文章には、自分自身の考えや自分の文体の好みといったものを反映させる余地はない。ここでは、与えられた課題を既定の弁論構成の手續きにしたがつて、自らの意志を離れなれば自動的にテキストを生産できるようになることこそが目指されているからである。^{②6}一方、学校を出てから成人したのちのデカルトが企てた新たな試みは、この「文字＝書物」の権威に牛耳られていた当時の学問のあり方の根本を突き、それを完全に放棄することによって開始されたものであつた。デカルトは「文字による学問」を、本当らしく思われるにすぎない机上の空疎な知識の寄せ集めとみなし、その不毛性と無用性を説いてやまない。

それゆえ、教師たちの手から解放される年齢になるとすぐに、わたしは文字＝書物による学問をまったく放棄してしまった (Je quittrai entièrement l'étude des lettres)。そして、これからは自分自身のうち (en moi-même) にか、または世間という大きな書物のうちに (dans le livre du monde) 見出される学問だけを求めようと決心して、自分の青年時代の残りを、旅をしたり、宮廷や軍隊を見たり、さまざま気質や身分の人びとと交流したり、いろいろと経験を積んだり、運命の巡りあわせる出会いのなかで自分自身を試したりして、どんなところにおいても目の前の物事から何か利益が引き出せないかと考えをめぐらすことに費やした。(AT, VI, 9)

こうしてデカルトは、書物を捨てて旅に出て、「自分自身のうち」ないしは「世間という大きな書物」を、自分自身の頭と体を頼りに厳しい検討の対象としながら、自分自身に新たな「精神指導の規則」を課していく。なおここで、デカルトが「規則」というものを無用とみなしていたわけではなかったことに留意したい。本稿冒頭に引いた書簡のなかでも、「およそ規則というものが、修辞学においても音楽においても有益なものであることには変わりがない」と述べていたように、この「自ら^キ考^トえる」哲学者は、書物＝権威＝他人の言葉に頼らず、自分のみを頼りとし、たった一人森の中を手探りで進むようにして、自らの精神を導くのに有効と見定めた「規則 (regulae)」を編み出していく。かたや「私」を滅却して無数の言葉を外から掻きこみ整備することで造りあげられるプロギユムスマタの世界があり、かたや「考える私」をすべての出発点とし「私」で充滿する世界の創出を願って樹立されたデカルトの新しい哲学がある。実際にはデカルト自身は、この両極の間で宙吊りになっていたのではないか。なおも忘れてはならないのは、デカルトが「まったく放棄してしまった」と断言する「文字＝書物による学問」の含む内容が、古典古代からラ

テン中世、スコラ学、ルネサンス人文主義だけでなく、東のビザンツの学術的伝統までをもとりこんだ遠大な世界であったというところである。そうである以上、一見して淡々と語られるデカルトのテクストの背後に隠されたその試みの気宇壮大さと困難のほどもまたおのずと感知されよう。その意味でもデカルトのテクストは、比類ない「無造作スプレマツマツウの修辞学マツマツウ」の実物見本なのである。

注

- (1) « Pour la Musique de M. Bau. [= Bannius], ie croy qu'elle differe de l'Air de Bosset [= Boëssel], comme la Creye d'vn Escolier qui a voulu pratiquer toutes les regles de sa Rethorique, differe d'vne Oraison de Ciceron, où il est mal-aisé de les reconnoistre. Le luy en ay dit la mesme chose, & ie croy qu'il l'aoué à present ; mais cela n'empesche pas qu'il ne soit tres-bon Musicien, & d'aillieurs fort honeste homme, & mon bon amy, ny aussi que les regles ne soient bonnes, aussi bien en Musique qu'en Rethorique. » (Lettre de Descartes à Mersenne, décembre 1640, AT III, 255 ; 下線強調筆者)
- なお、デカルトのテクストの引用は『アタン・タヌリ版 デカルト全集』*Œuvres de Descartes*, Charles Adam et Paul Tannery, Paris, Vrin / CNRS, 13 vols, 1963-1973 [nouvelle présentation : réédition en petit format, 1996] の *Œuvres de Descartes* 略号 AT・巻数 (ローマ数字)・頁数 (アラビア数字) に表記する。
- (2) *Descartes, Correspondance, Tome IV*, Charles Adam et Gaston Milhaud (éds.), P. U. F., Paris, 1947, pp. 225-236. 以下 AM と略記。
- (3) AT 版は、クレルスリエ版『デカルト書簡集』第二巻についてはその第二版 (一六六六年、初版は一六六三年) に依拠している (AT, I, « Remarques sur l'orthographe de Descartes », p. CV)。*Lettres de M. Descartes, Tome II*, Paris, C. Angot, 1666, p. 271-276. « Creye » の語がみられるのは二七二頁、最下行。フランス国立図書館に所蔵の版では、この語の上から「*Chrie*」と手書きで修正がなされている。
- (4) AT, III, 255, 脚注 c 参照。

- (5) AMI, p. 218 : *Descartes. Œuvres philosophiques, Tome II (1638-1642)*, Ferdinand Alquie (éd.), 1992 [1^{ère} édition 1983], p. 285.
- (6) René Descartes, *Toute la lettre 1619-1650*, a cura di Giulia Belgioioso, Milano, 2005, 2009, p. 1344, note 10.
- (7) 『デカルト全書簡集 第四卷 (一六四〇—一六四二)』大西克智・津崎良典他訳、知泉書館、二〇一六年、二二六頁。
- (8) René Descartes, *Œuvres complètes VIII. Correspondance Volume I*, éditée et annotée par Jean-Robert Armogathe, Gallimard, Paris, p. 431 et p. 955 (88, note 9). 引用文中の〔 〕内補足は筆者による。
- (9) 本論は、筆者の博士学位論文 Shizuka Kubota, *Descartes et l'éloquence de la vérité. Les héritages jésuite et humaniste*, Université Paris IV-Sorbonne, février 2012 の第二部第四章 (一八四—二〇二頁) および、久保田静香「デカルトとイエズス会学校人文主義教育——よく書くために——」、『フランス文学・語学研究』第二五号、早稲田大学大学院、二〇〇七年、二九—三九頁で扱った内容に大幅な加筆修正を加えたものである。なお、二〇一五年十一月七日の「早稲田大学ヨーロッパ中世ルネサンス研究所・第二十回研究会 (早稲田大学)」にて「イエズス会のレトリック教育とプロギユムナスマタ (予備練習) の伝統——デカルト『方法序説』から出発して——」と題する日本語による口頭発表を行っており、本論はおおむねこの口頭発表の内容を踏まえている。
- (10) ラ・フレイシユ学院の設立過程については次を参照。Camille de Rochemonteix, *Un Collège de Jésuites aux XVIII^e et XVIII^e siècles. Le Collège Henri IV de La Fleche*, Tome I, Le Mans, Leguicheux, 1889 ; 山田弘明「バンレシム学院の挑戦——十七世紀フランスのコレージュー——」『名古屋高等教育研究』第二号、二〇〇二年、七九—九二頁；ウィリアム・バンガート『イエズス会の歴史』上智大学中世思想研究所監修、原書房、二〇〇四年、七六—八三頁／一四四—一五〇頁。
- (11) ヒュームのラ・フレイシユ滞在は一七三五年五月から一七三七年真夏まで。Ernest Campbell Mossner, « Hume at La Fleche, 1735: An Unpublished Letter », in *Texas Studies in English*, Vol. 37, 1958, pp. 30-33.
- (12) 十八世紀以降のラ・フレイシユ軍士官学校の歴史的過程については「Education, Culture et Patrimoine au Pyramte nationale militaire, Le Mans, Édition de la Reinette, 2011, pp. 2-3.
- (13) Antoine Compagnon, *La classe de rhéto*, Gallimard, « Folio », 2012.
- (14) Gabriel Codina Mir, *Aux sources de la pédagogie des Jésuites. Le « modus parisiensis »*, Roma, Institutum Historicum

デカルトとプロギユムナスマタの伝統

- Societatis Jesu. 1968. p. 256 seq.
- (15) Olivier Millet, « La Réforme protestante et la rhétorique (circa 1520-1550) », in *L'Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne (1450-1950)*, Marc Fumaroli (ed.), Paris, P. U. F., 1999. pp. 259-312.
- (16) G. Codina Mir, *Aux sources de la pédagogie des Jésuites*, op. cit., p. 151 seq.
- (17) Louis B. Pascoe, S. J., « Response to Gabriel Codina, S. J. », in *The Jesuit Ratio Studiorum, 400th Anniversary Perspective*, Vincent J. Duminuco, S. J., New York, Fordham University Press, 2000. pp. 50-55. なお、イエズス会学校の教育プログラムの起源をいかに求めるかという問題をめぐって、十九世紀末以降、論争が起きていた。この論争の文脈は Codina Mir の著作の意義については、次を参照のこと。月村辰雄「イエズス会のレトリック教科書——ソアレスの『修辞学』——」『フランスにおける「私」のデイスツール』平成八、九、十年度科学研究費研究成果報告書（研究代表者、田村毅）、一九九九年、九—十頁、注六。
- (18) 本稿では次のラテン語・フランス語対訳版を用いる。 *Ratio studiorum. Plan raisonné et institution des études dans la Compagnie de Jésus, édition bilingue latin-français*, présentée par Adrien Demoustier et Dominique Julia, traduite par Léone Albreux et Dolorès Plaron-Julia, annotée et commentée par Marie-Madelaine Comperè, Paris, Belin, 1997. 以下、*Ratio studiorum* と略記。
- (19) 『学事規定』の兼定過程については次が詳しい。Dominique Julia, « L'élaboration de la *Ratio studiorum*, 1548-1599 », in *ibid.*, pp. 29-69.
- (20) C. de Rochemonteix, *Un Collège de Jésuites aux XVII^e et XVIII^e siècles*, op. cit., Tome III, Chapitre I, p. 4.
- (21) François de Dainville, « L'évolution de l'enseignement de la rhétorique au XVII^e siècle », in *L'Éducation des Jésuites (XVII^e-XVIII^e siècles)*, Paris, Minuit, 1978. p. 190.
- (22) Étienne Gilson, *René Descartes, Discours de la méthode, texte et commentaire*, Paris, J. Vrin, 1987 [1^{er}e édition, 1925], p. 101.
- (23) Jean Lafond, « Descartes philosophe et écrivain », in *L'Homme et son image : morales et littératures de Montaigne à Maigneville*, Paris, Honoré Champion, 1996. p. 63.

- (24) *Ratio studiorum*, *op. cit.*, p. 165.
- (25) G. Codina Mir, *Aux sources de la pédagogie des Jésuites*, *op. cit.*, p. 84.
- (26) *Ratio studiorum*, *op. cit.*, p. 78 et p. 92.
- (27) 文法上級 *ibid.*, « Gradus », p. 189 ; 文法中級 *ibid.*, « Gradus », p. 185 ; 文法上級 *ibid.*, « Gradus », p. 180 ; 人文学級 *ibid.*, « Gradus », p. 174 ; ロトリック学級 *ibid.*, « Gradus », p. 165.
- (28) A. Collinot et F. Mazière, *L'Exercice de la parole. Fragments d'une rhétorique jésuite*, Paris, Éditions des Cendres, 1987, pp. 35-43.
- (29) *Ratio studiorum*, *op. cit.*, 「ロトリック学級教師の規則・三七六〔授業時間配分〕」 p. 166 ; 「同規則・三八五〔ギリシア語宿題の方法〕」 p. 170.
- (30) Geneviève Rodis-Lewis, *Descartes. Biographie*, Paris, Calmann-Lévy, 1995, p. 31.
- (31) André Collinot et Francine Mazière, *L'Exercice de la parole*, *op. cit.*, p. 32. なお、後述するプロキユムナスマタ課題としての「寓話」でもソクロソスが用いられた。
- (32) Pierre Gautruche (1602-1681) ; François-Antoine Pomey (1618-1673) ; Michael Pexenfelder (1613-1685) ; Joseph de Jouvançy (1643-1719) などのイエズス会士らにより、十七世紀から十八世紀にかけて間断なく「フナーブル神話集」が刊行されてくる。
- (33) H・I・マラー著『アウグスティヌスと古代教養の終焉』岩村清大訳、知泉書館、2008年、「第一部第五章：博識とその起源」九三―一〇七頁（以下わけ一〇〇頁）； Annie Bruter, « Entre rhétorique et politique : l'histoire dans les collèges jésuites au XVII^e siècle », in *Histoire de l'éducation*, n°74, 1997, pp. 59-88.
- (34) 根占献一『ソイレメンツェ共和国のビューーメニスト』創文社、二〇〇五年、四一頁。
- (35) Cypriano Soarez, *De arte rhetorica libri tres, ex Aristotele, Cicerone & Quintiliano*, prima editio 1562. 筆者が参照したのほ1605年版。なお「ソアレズ『ロトリカ』の編纂・受容過程については別途論じる必要がある。 Cf. Jean Dietz Moss and William A. Wallace, *Rhetoric & Dialectic in the Time of Calisto*, Washington D. C., The Catholic University of America Press, 2003, pp. 115-119.

デカルトとプロキユムナスマタの伝統

デカルトとプロギュムナスマタの伝統

- (36) 月村、前掲論文「イエズス会のレトリック教科書」、十四—十五頁。
- (37) *Ratio studiorum*, *op. cit.*, p. 167.
- (38) イエズス会学校における「競争原理」と「監視体制」については、エミール・デュルケーム『フランス教育思想史』小関藤一郎訳、行路社、一九八一年、五一六—五二七頁。
- (39) Shizuka Kubota, « Descartes orateur et poète. Analyse d'un texte de jeunesse : la dédicace du placard de licence en droit (1616) » 『早稲田大学文学研究紀要』第五三輯、早稲田大学大学院文学研究科、二〇〇八年、一三一—一五一頁。
- (40) Shizuka Kubota, « La poétique de la Naissance de la Paix (1649) : l'allégorie et le burlesque dans le ballet de Descartes », *Études françaises* (早稲田大学フランス文学研究室), n°15, 2009, pp. 1-13.
- (41) *Ratio studiorum*, *op. cit.*, p. 175.
- (42) Henri-Tréneé Marrou, *Histoire de l'éducation dans l'antiquité. I. Le monde grec*, Paris, Seuil, 1981 [1^{re} éd. 1948], p. 277 *sq.*; Stanley F. Bonner, *Education in Ancient Rome. From the elder Cato to the younger Pliny*, London, Methuen & Co Ltd, 1977, p. 250 *sq.*; Ronald F. Hock and Edward N. O'Neil (eds.), *The Chreia in Ancient Rhetoric. Volume I. The Pro-gymnasmatia*, Atlanta, Scholars Press, 1986, pp. 3-60; George Alexander Kennedy, *Progymnasmatia. Greek Textbooks of Prose Composition and Rhetoric*, Atlanta, Society of Biblical Literature, 2003; Teresa Morgan, *Literate Education in the Hellenistic and Roman Worlds*, Cambridge University Press, 1998, p. 190 *sq.*
- (43) 月村辰雄「プロギュムナスマタ——ある修辭学の練習問題集をめぐる」、『レトリックとフランス文学——伝統と反逆——』平成五年度科学研究費研究成果報告書(研究代表者：塩川徹也)、一九九四年、五一—九十九頁。同「プロギュムナスマタの西漸」、『規範から創造へ——レトリック教育とフランス文学——』平成六—八年度科学研究費研究成果報告書(研究代表者：塩川徹也)、一九九七年、五一—二〇頁。
- (44) 堀尾耕一「プロギュムナスマタ文獻の伝承」『フィロロギカ』第一号、二〇〇六年、一一—十七頁。『アプトニオス』プロギュムナスマタ(翻訳と解題)『東京大学西洋古典学研究室紀要』第二号、二〇〇六年、四五—八六頁。
- (45) 香西秀信・中嶋香諸里『レトリック式作文練習法——古代ローマの少年はどのようにして文章の書き方を学んだか——』明治図書、二〇〇四年。

- (46) 「ヘルモゲネス修辞学体系」と呼ばれて伝承された写本は、次の五つの修辞学書から成る。①アプトニオスの『プロキュムナスマタ』、②『スタシス(争点)論』、③『発想論』、④『文体論』、⑤『能弁の方法』。堀尾、前掲論文、「プロキュムナスマタ文献の伝承について」三頁。なお、この五つの著作については、M・パティヨンによる校訂・希仏対訳版が刊行されている。 Cf. *Corpus rhetoricum*, Tome I-V, textes établis et traduits par Michel Patillon, Paris, Belles Lettres, 2008-2014.
- (47) アレクサンダリアのアエリオス・テオン(一世紀)、タルソスのヘルモゲネス(二世紀)、アンテオキアのアプトニオス(四世紀)、シユラのニコラオス(五世紀)のものがあり、いずれもギリシア語で書かれた。テオンの『プロキュムナスマタ』は、M・パティヨンによる校訂・希仏対訳版を参照: Aelius Theon, *Progymnasmata*, texte établi et traduit par Michel Patillon, Paris, Les Belles Lettres, 1997. なお、「アプトニオスの『プロキュムナスマタ』」は、前掲書 *Corpus rhetoricum* の第一巻(二〇〇八)に収められている。
- (48) 月村、前掲論文「プロキュムナスマタ——ある修辞学の練習問題集をめぐって——」九頁。
- (49) « On y [= dans la classe d'humanités] étudiait la *Chrie*, la fameuse *Chrie*, la reine des devoirs de littérature préparant aux grands discours ». *L'Élève de rhétorique (Candidatus rhetoricae) au collège Louis-le-Grand de la Société de Jésus au XVIII^e siècle par le R. P. Joseph Toumey*, traduction par H. Ferré, Paris, Librairie Hachette et Cie, 1892. « Avant-Propos », p. V. 下線強調および「」内補足は筆者による。
- (50) R. F. Hock and E. N. O'Neil (eds.), *The Chreia in Ancient Rhetoric*, op. cit., p. 3; F. Trouillet, « Les sens du mot XREIA: des origines à son emploi rhétorique », in *La Lionne*, n° 3, 1979, p. 55; H. A. Fichel, « Studies in Cynicism and the Ancient Near East: The Transformation of a Chreia », in J. Neusner (ed.), *Religions in Antiquity: Essays in Memory of E. R. Goodenough*, Leiden, Brill, 1970, p. 374.
- (51) R. F. Hock, « Cynics and Rhetoric », in *Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period*, 330 B. C.-A. D. 450, Stanley E. Porter (ed.), Leiden-New York-Köln, Brill, 1997, pp. 755-773 (surout, p. 761).
- (52) クレイアの実例については、月村、前掲論文「プロキュムナスマタ——ある修辞学の練習問題集をめぐって——」九頁、および、堀尾、前掲論文「アプトニオス『プロキュムナスマタ』(翻訳と解題)五二―五四頁を参照のよう。

デカルトとプロキュムナスマタの伝統

デカルトとプロギュムナスマタの伝統

- (32) F. de Dainville, « L'enseignement de la rhétorique au XVII^e siècle », in *L'Éducation des Jésuites*, op. cit., p. 185.
- (34) たゞせば「妻をめとるべきか」は一般論題、「ソクラテスは妻をめとるべきか」は個別案件とされる。要するに、特定の人物を介させているかどうか、個々の状況を考慮する必要があるかどうかという点において両者は区別される。
- (35) キケロ「発想論」が「ボエティウスのトピカ」に与えた影響、および、これら西側の修辞学書とプロギュムナスマタのあり方の根本的な違いについては、堀尾、前掲論文「プロギュムナスマタ文献の伝承について」(十二—十六頁)。
- (36) アグリコラのラテン語訳を介したルネサンス時代の西側文化圏における『プロギュムナスマタ』復活の過程については、月村、前掲論文「プロギュムナスマタ——ある修辞学の練習問題をめぐって——」(十五—十六頁)。
- (37) 月村、前掲論文「プロギュムナスマタ——ある修辞学の練習問題をめぐって——」(十七頁；François Charnot, *La pédagogie des Jésuites*, Éditions Spes, 1943)。
- (38) *De arte rhetorica libri tres ex Aristotele, Cicrone et Quintiliano de prompti editi pridem ab R. P. Cypriano Socario, nunc primum in versibus comprehensi in gratiam rhetorum ac humanistarum collegii Remensis Societatis Jesu, Accessit Aphthonii propter miram cum rhetoricis praeeceptionibus conjunctionem...*, Remis, apud F. Bernard, 1636。下線強調は筆者による(下記、同様)。
- (39) Charles Pajot, *Tyrocinium eloquentiae, sive Rhetorica nova et facilior. Sic verbis non redundans, Ut Eloquentiae praeeptionibus abundet : Sic Aphthoni Progymnasmatum, Et Socarj Rhetoricam amplectens, Ut praestantissimorum Rhetorum, qui haecenus de Eloquentia scripserint, Universam artem facili methodo suppediet : Sic denique Rhetoribus utilis, Ut humanis commoda sit, & sprmae Scholae Grammaticae Auditoribus non inutilis*, Besis, apud F. de la Savgere, 1647.
- (40) *Ibid.*, pp. 242-267。同著第三卷第五章から第八章まで。
- (41) C. de Rochemonteix, *Un collège de Jésuites aux XVII^e & XVIII^e siècle*, op. cit., p. 33.
- (42) Jacob Masen, *Palaestra oratoria ... in Progymnasmatum eloquentiae atque exercitationes rhetorum proprias... distributa cum resolutione et artificio Iulianarum orationum adjuncto, auctore P. Jacobo Masenio, Coloniae Agrippinae* : apud J. Buseum, 1659.
- (43) Antoine-François Pomey, *Candidatus rhetoricae seu Aphthonii Progymnasmatum in meliorem formam usumque redacta*,

デカルトとプロキユムナスマタの伝統

(73) *Ibid.*, p. 240.

(74) *Ibid.*, pp. 201-212.

(75) * craie * のラテン語 Creta の音韻変化 : /lat. creta/ > /kreta/ > /kreit/ > /kroi/ > /krwe/ > /croie/ (以上、早稲田大学教授・瀬戸直彦先生の「」教示による)。また * craie * の表記と「」は、時代に「」 * 1549 craie, croye, cree ; 1564, 1606 croye, crée, cree, craye ; 1694, 1718 craie ; 1740-1935 craie * と「」た変遷が見られる。Cf. *Dictionnaire historique de l'orthographe française*, Nina Catach (dir.), Paris, Larousse, 1995, p. 300. デカルトの * Creye * と「」完全に「」致する綴りは見出されないが、かぎりなく近いものはいくつか見出される。

なお、十六—十七世紀の辞書を参照しても、* craie * のものに * esquisse * の意味は見出されないが、* craie * は * crayon * の語源でもあることから、* craie=crayon=esquisse * と捉える「」は「」。Cf. *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Oscar Bloch et Walter von Wartburg (dir.), Paris, P.U.F., * quadrige * 2004 [1^{re} édition, 1932], pp. 166-167. た「」はモリエールの『恋は医者』 (*L'Amour médecin*, 1665) 序文「」 * crayon * を * dessin, esquisse * の意味で用いらる例が見出される。Cf. François Génin, *Lexique comparé de la langue de Molière et des écrivains du XVII^e siècle, sur quelques points de philologie française*, Paris, Didot Frères, 1846, p. 89.

(76) 自分の考えや感情とは縁を切り、ディスクール構成の指針に従ってテクストを生産する主体——一人称単数形を「レトリカルな私」と呼んで、その特質を浮き彫りにした月村氏の論考を参照。月村、前掲論文「プロキユムナスマタ——ある修辭学の練習問題集をめぐる——」、「十一—十二頁および「プロキユムナスマタの西漸」、七—九頁。

本稿は、平成28年度日本学術振興会特別研究員奨励費(15J01027)の助成を受けた研究成果の一部である。